

## はじめに

東日本大震災から4年が経過いたします。

この未曾有の災害により仙台市は甚大な被害を受け、若林区においても多くの尊い命が犠牲となりました。東部の沿岸地域は大津波の直撃を受け、豊かな緑と水をたたえた美しいふるさとの姿を一変させました。家や職場、学校をはじめ、農地、海岸、道路など様々な生活の基盤が失われ、その再建のために震災直後から多くの方々が懸命の努力を続け、復興の歩みを進めてまいりました。

被災されたすべての方が落ち着いた暮らしを取り戻す日が近いことを確信しておりますが、たとえ生活の基盤が整ったとしても、大切な家族や親しい人を失った悲しみは癒えるものではありません。受けとめがたい恐怖と苦しみの記憶も消えることはないと思います。無念のうちに亡くなった方への哀惜の念は深く心に刻まれ、これからも日々その思いを抱えていかれることと存じます。

若林区では昨年3月、沿岸部で被災された方の体験を生の声としてまとめた記録集「語り継ぐ震災の記憶」を発行いたしました。このたび、国連防災世界会議が開催されるのを機に、その記録集から5人の方の体験を要約のうえ改めて発行するはこびとなりました。この記録が、あの巨大地震と大津波がもたらした災害の真実を後世に伝え、防災への取り組みの一助となることを願います。

辛い体験をお話くださった語り手の方々をはじめ、記録集の制作にご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

2015年3月

若林区長 高橋 新悦

一度死んだようなものだから、何でもできると思ってんのかなあ

最知幸子（1944年生まれ）

震災時 若林区荒浜在住

すごいよね、自然の力って。新町だけで300所帯もあったのに、荒浜全体がぞっくり全部なくなって、この草ボウボウだもの。いまだに信じられないよ。

あのときは夫が運転する車に乗って避難したんだけど、2丁目の交差点を越えてすぐ、渋滞で車が進まなくなったの。どうしてこんなに混んでるだろうって、後部座席からふっと振り向いたら、黒っぽい壁みたいな津波が、20メートルぐらいの高さの防風林を越えてるところだった。音は聞こえなかった。騒いでるうちに、津波がバーンと車にぶつかったと思ったら、ふっと車が浮いて流され始めたの。

いろんなものにぶつかって、もう駄目だって思ったときもあったけど、そのまま1キロか2キロも流されたあと、どこかの屋敷の居久根（防風用の屋敷林）にぶつかったのね。そうしたら、どうしてだろ、今でも不思議なんだけど、すーっと車の窓が下がって開いたの。そこから急いで這い出して木にしがみついたの。夫も一本置いた別の木につかまった。車はほかの車と一緒に流されて行っちゃった。

辺りは見渡す限りの泥沼で、深さは2mぐらいかな。私たちのほかには、誰もいなかった。そのうちに雪が降り出して、風も強くて、すごく寒かったのと、足の下をいろんなものが流れてくるのね。ガスボンベがガスを噴いて跳ねながら流れてきて、いつ爆発するかって思うと、怖いなんてもんじゃなかった。においもひどかったし、あと、余震が来るたびに木が揺れるのよ。足は水につかってぐちゃぐちゃだし、頭はがんがん割れるように痛いし。でも、落ちたら死ぬって思って、必死ですごった。

そのうちに日が暮れて、右の仙台新港の方が燃えてるのが見えた。左のほうもすごく明るくて、あとで聞いたら、閉上で大変な火事だったんだってね。高速道路に車がいっぱい通ってるのも見えて、道路のほうから声も聞こえてくるんだけど、こっちがいくら呼びかけたって聞こえないの。救助のヘリコプターもたくさん飛んできたけど、大声で呼んでも、帽子を振っても気が付いてもらえなかった。帽子も服も黒づくめだったものね。だから、震災後は着る物が派手になって、赤とか黄色とかオレンジとかを着るようになったの。

だんだん時間がたつと、つい眠くなるんだよね。眠って水に落ちたら死んじゃうってわかってても、ついつい、コクンと落ちそうになるから、とにかく夫と喋ってた。たまたま持ってたお饅頭を分けて食べたりね。

次の朝の6時半ごろかな、救助隊のヘリコプターが来てくれたときは、ほっとした拍子にふらふらっと腰が抜けて、立てなくなった。運ばれた自衛隊病院で、低体温症だっていわれた。夫は、前から脊椎を痛めてたんだけど、脊椎の軟骨が全部潰れてたの。図書館から借りた本を濡らせないからって、ショルダーバッグをずっと肩に掛けてたせいかもしれない。

それと、夫はよく夢にうなされるの。今は少なくなったけど、前は1週間に2回も3回もうなされて、「あっち行け、あっち行け」って、足を蹴飛ばして、足の生爪剥がしたこと

もある。あんまりひどいから揺すって起こすと、「ああ、夢だった」って。昼間は何も言わないんだけど、津波で身内の人も亡くなってるし、恐怖の体験が夢に出てくるんだかね。私も仲良くしてた5人組のうち、私以外はみんな亡くなってしまおうし、やっと少し落ち着いたころに背骨を痛めて2か月も入院したりで、精神的にも肉体的にも、ガタガタ来ましたよ。

それでも、避難所から仮設住宅に入ったあと、集会所でカフェを始めたの。最初は集会所の奥の、ちょっと引っ込んだところにテーブル出して、お茶なんか飲めるようにしたの。そしたら、「なかよしカフェ」って名前を考えてくれた人がいて、看板を出したら、みんなが集まって来るようになった。最初はカフェに反対の人たちもいて、すごくエネルギー使ったり、大変だったけど、やっぱり始めてよかった。

ほかに、大正琴のグループと、あと、「鶴亀会」という手仕事のグループもやっています。私が入院してるときに覚えた折り紙の風船とか、カエルや亀のストラップをつくって、イベントなんかに出すと、みんなが買ってくれるのね。そのお金でカフェに出すお菓子を買ったり。それから、カフェで出す漬物も「鶴亀会」の人たちでつくるの。近くの畑を借りてつくった野菜を漬物にして、試食してもらって、欲しいって人には買ってもらう。

うちは元々転勤族なの。夫が航空管制技術官だったから、北海道にもいたし、沖縄にいたこともあるけど、荒浜の家は昭和57年に建ててからずっと住んでたから、私にとっては、いちばん長く住んだふるさとだった。だから、本当は離れたくなかったんだけど、いろいろ思うようにいかなくて、結局、長野の娘の家の近くに家を買ったの。8月に引っ越し予定だけど、カフェもサークル活動も、まだ頑張ってる。なんでこんなことしてんのかなあって気もするけど、もうなんにも怖くないっていうか、一度死んだようなものだから何でもできると思ってんのかなあ。自分でもよくわからないけどね。

(談：2013年8月)

## 人間として大事なものを呼び起こされたような気がします

大友京子（1953年生まれ）

震災時 若林区藤塚在住

私が住んでいた藤塚は、松林に視界をふさがれて海は見えませんでした。海岸線までほんの数メートルです。もっと内陸のほうだと、家の2階に上って助かったという話も聞きますが、藤塚の場合は、たとえ2階でもだめだったと思います。約90世帯すべてが家を流されて、地域は壊滅しました。亡くなられた方も、お年寄りを中心に27人です。津波が来る前、消防団の人たちが「逃げろー！」と言って回ったり、堤防の工事現場で作業をしていた人たちが大声で叫んでくれなかったら、もっと多くの犠牲者が出ていたと思います。

うちは私たち夫婦と娘と義父の4人暮らしでした。義母は10年以上前から岩沼の病院で入院生活を続けていたんです。

地震が起こったとき、私は足の弱った90歳の義父と2人で家にいました。あんな津波の光景は想像もできませんでしたが、とっさに何か大変なことが起こるっていう直感がして、2階から駆け下り、「じいちゃん、逃げるよ！」と義父を車に乗せて、急いで東六郷小学校に向かいました。

小学校に着いたのは3時10分ごろです。ほかにも大勢の人が避難して校庭に集まっていた。車に乗ったままの人も多かったようです。10分ぐらいたって、大津波が迫っているというラジオ放送を聞き、義父の手を引いて急いで校舎に向かいました。

混雑のなか、ようやく校舎に入り、2階への階段に向かって廊下を進んでいるとき、前方の階段で車椅子の人が苦勞しているのが見えました。義父はどうか自力で歩けたものですから、私はいったん手を離してそっちに行き、階段を途中まで上って、車椅子を持ち上げる手助けをしました。

校舎の玄関から津波が押し寄せてきたのは、そのときです。だから、私は直接は見えないんです。水の高さは50センチぐらいだったそうですが、でも、水が引くときの強い引き波が、90歳の義父の足をさらいました。義父はほかの数人の人たちと一緒に、校舎と校舎の間の中庭にガラス戸ごと突き落とされました。近くにいた人たちがすぐに引き上げてくれたんですが、もうだめでした。心臓が悪かったから、即死だったと思います。義父は100歳まで生きたいって、よく言っていました。私が手を離れた直後だったんです。もっと早く校舎に入っていれば助かったんじゃないとか、いろいろ思い出すと、今でも悔しいです。

義父と一緒に落ちた方も1人亡くなりましたし、私の親しい友人の1人も校舎の別の場所で同じような引き波の犠牲になりました。助け出された人のなかには、首から下、全身ずぶ濡れの人もいて、みんなで新聞紙やビニールで体をくるみ、マッサージをして体を温めました。その人は一命を取りとめ、今も元気に暮らしておられます。義父と一緒に落ちた女性2人も助かって、私は今でもときどきお目にかかっています。

夫は地震のあと、仕事先から帰ってきて自宅のそばにいたとき、船が陸に上がってくる

のが見えたんだそうです。次に波が見えて、これは津波だ、大変だと、慌てて自分のトラックに飛び乗って、内陸側の私の実家まで逃げたそうです。気づくのがもう少し遅れてたら、そのまま流されていたでしょうね。地震のあとは、家族となかなか連絡がつかなくて心配しましたが、2、3日後には私の実家で夫や娘と再会することができました。

義母は入院していた病院が津波被害を受け、そのときは無事に避難させていただいたんですが、震災からちょうど1か月後の4月11日、転院先の病院で亡くなりました。

地震や津波であちこちの葬祭場も壊れてしまい、亡くなった義父母のお葬式も、いつ挙げられるのかわからない状態が続きました。私はそのことが気にかかっていたまらなかったんです。その後、葬祭場の修理が進んで、6月には地域全体でお葬式をするという話になりましたが、私はそれを待たずに、5月中旬に義父母の葬儀を挙げました。まだ混乱のなかでしたから、会葬者は少数でしたが、私は2人の供養ができたことで、ようやく気持ちが少し落ち着きました。

自宅は塀と土台以外、すべて流されました。壊れた家のあと片づけが大変だったという話をよく聞きますが、うちは波がきれいさっぱり流して片づけてくれたようなものです。先祖の記録とか、義母が好きだった果樹とか、いろいろ思い出されます。いったいどこまで流されていったんだでしょうね。

ただ、近所の人やボランティアの方々のおかげで、写真はだいぶ手もとに戻りました。ほかにも支援金や義援金をはじめ、いろんな援助を受けて、本当に感謝しています。

その後、内陸側に新築物件を見つけて、今はそこに住んでいます。夫は元の敷地の一部に畑をつくって通っています。私は震災前から参加していたコミュニティ活動を今でも続けています。

大震災は悪夢のような嫌な出来事でしたが、その後の被災者同士、被災者とボランティアなどの交流を通じて、人と人とのつながりや助け合いが、人間としていちばん大切な心呼び起こしてくれたような気がしています。

(談：2013年10月)

## 亡くなった方々の無念の思いを感じながら暮らしています

菊地裕子（1964年生まれ）

震災時 若林区井土在住

いきなりドンッという衝撃がきて、家が揺れ始めたときは、本当に怖かったです。慌てて畑に飛び出して、長い地震のあいだ、高校生の長女とずっと抱き合って震えていましたが、揺れが収まったら、小学4年生の次女のこと心配になりました。地震をすごく怖がる子なんです。それで、義父母に声をかけて、長女と2人で東六郷小学校に向かいました。

うちから学校は車で2、3分なので、児童の親のなかではいちばん先に着いたと思います。先生も子どもたちも校庭の真ん中に避難していました。私は先生たちの話で、6mの津波が来ることをそのとき初めて知ったんです。東六郷小学校は指定避難所なので、地域の人たちもどんどん集まってきます。私は義父母が津波のことを知らないかもしれないと心配になって、また長女と家に引き返しました。そのときには、地震から30分ぐらいたっていたと思います。

義父母は幸い、もう津波のことを知らされて、貴重品を軽トラックに積み込み終わっていました。ところが、そのときにふと、1年前のチリ地震津波のことが頭に浮かんだんです。あのときは警報が出てものんびりしている人が多かったんですが、私は海辺で育って津波の怖さを知っていたから、子どもを遠くの親戚に預けたり、学校に行って被災者の受け入れ準備をしたりと、いろいろ働きました。でも、結局、何もないうまま夜まで待機させられただけで帰宅したんです。

それで、今度も長期戦になるかもしれないと思ったものだから、家に入って毛布とか飲み物とか、必要なものをそろえ始めたんです。その最中に、ひとりだけ外で待っていた義父が、津波だって叫ぶ声が聞こえました。

慌てて表に飛び出したら、松林とほとんど同じぐらいの高さの真っ黒い塊が、ゆっくり迫ってくるのが見えました。娘と義母は屋内でしたので、津波だって教える前に「2階に上がって、2階に！」と叫びながら、私と義父も家に飛びこみました。

2階に駆け上がったとたん、ちょうど目の高さぐらいのところに津波が見えました。すごく大きな真っ黒い塊が、まるで生き物みたいに襲ってくるんです。音は聞こえませんでした。私の記憶の中では音が完全に消えているんです。その黒い塊が、触れたものを片っ端からなんでも呑み込んでしまう。並んでいた屋根がどんどんなくなって、まわりの景色が変わっていくんです。ああ本当に日本沈没だ、自分もあの黒い塊の中に入って死ぬんだなって思いました。

でも、娘はたったの17歳で命を落とすのかと思ったら、すごく不憫で、「ごめんね」とか「生まれてきてくれてありがとう」とか、「私たちは無理だろうけど、あんたは泳げるんだから、頑張って絶対に助かりなさいよ」とか、夢中で声をかけ続けました。

義父は屋根に登っていたので、走っている車が津波に追いつかれて呑まれるのも見えたそうです。「助けて」と叫ぶ声や、人が水のなかでもがいているような音も聞こえましたが、遠くなので助けることもできない。とにかく「頑張れー、頑張れー」って叫ぶだけでした。

家もいつ倒されるかわからないので、ベランダから身を乗り出して、家が倒れるのと同時に脱出する覚悟をしていました。そのときに夫からの携帯がつながったんです。

夫は塩竈付近にいて、こっちの状況を知らなかったので「大丈夫？」なんて、ちょっとのんきな口調でした。私は小学校にいる次女を迎えに行ってほしい、私たちはたぶん助からないからって夢中で叫んだあと、娘に電話を替わりました。最後に父親の声を聞かせたかったんです。

一方で、生きなくっちゃ、なんとかしなくちゃいけないとは思うんですけど、なす術もないまま、気がついたら、家を取り巻いた濁流の海に、いろいろなものが浮かんでるのが見えました。波の勢いがなくなってたんです。ああ、もしかしたら助かったかもしれないと思いました。

泥の海のなかに孤立した家からヘリコプターで救助してもらったのは翌日です。吊り上げてもらったとき、辺りの景色がすっかり見えましたが、東部道路を境にして東側は真っ黒、西側はいつもの風景で、天国と地獄みたいな感じでした。そのあと、東六郷小学校の子どもたちが避難している中学校に行って夫と次女に再会できました。

小学校のほうも、大変な状況だったようですが、子どもたちはしばらく、そのときのことや喋れなかった。どれだけ悲惨な恐ろしい光景を見たんだろうと思うと、言葉になりません。うちの子も、目の前でおばあさんが流されるのを見たとか、遺体が並んでいるのを見たということや、ようやく最近になって喋るようになりました。

次女は私たちが学校に戻ってこないし、父親とも連絡がつかなかったから、家族は全員が死んで自分一人になっちゃったと思って、一晩中泣きながら過ごしていたようです。そうした体験と避難所暮らしのストレスが重なって、一時めっきり痩せたり、夜中に涙が止まらなくなったりして、ずいぶん心配しました。私も一時、体調を崩しましたし、被災した家に戻って片づけをしていると、つい涙がこぼれたりします。

家の復興は何とか形になったとしても、心の復興は、なかなかむずかしいですね。亡くなった方々の事を思うと、生き残ってしまっただけで申し訳ないと思います。亡くなった方々の無念の思いを感じながら生きていく、そういう思いでずっと暮しています。

(談：2013年10月)

## 生き物が戻ってこない、人間も住めないんでしょうかねえ

佐藤洋子（1948年生まれ）

震災時 若林区種次在住

津波を見たのは、指定避難所の東六郷小学校にいたときです。近所のお年寄り3人を車で小学校に運んだあと、校庭に立っていたら、「津波だ、校舎の2階に上がれ！」っていう声がして、浜のほうを見たら、煙が立ち込めたような波しぶきが見えました。ふだん海は見えないのに、どうしてだろうと思いながら急いで2階に上がった直後、水がものすごい勢いで校庭に流れ込んできました。幸い、私が連れてきたお年寄りは無事だったけど、校庭の車の中や校舎の近くで津波に巻き込まれた人もいたみたいです。

そのときは、怖いっていうより、どうしよう、どうしようって思うだけで、頭が働かないんですね。人がごった返している中で、夫に声をかけられたんですけど、それまでは夫のことも頭から消えてましたね。夫は職場の人の車で小学校まで乗せてきてもらったそうです。

その晩はみんなでロウソクを囲んで過ごしました。子どもが泣いたり騒いだりしても、文句を言う人もいないんです。寝るスペースはあったんだけど、ずぶ濡れの人のお世話をしたりしてるうちに私も濡れちゃって、寒くて横になれないから、ずっと窓の外を見てました。星がものすごくきれいでしたね。それと、閉上のほうがすごく明るく光ってて、あとで聞いたら、大きな火事だったそうです。

六郷中学校の畳敷きの武道館に移ったのは、地震から2日目です。ここでの避難所生活はいろいろ大変でした。体育館に設けられた本部と離れてたものだから、いろいろ連絡の行き違いもあったし、最初のころは町内の役員さんたちが別の場所に避難していてリーダー不在だったというのも大きかったですね。

でも、とにかく食べなきゃいけないので、私たちの世代が中心になって、炊き出しだけはすぐに始めました。武道館には、ほかの地域の人も含めて200人ぐらいが暮らしてましたから、何をつくるのも200人分です。屋外にテントを張って調理場をつくったんですが、5升炊きの釜でご飯炊くなんてやったことなかったから、最初は真っ黒に焦がしてしまったり、断水していたあいだはバケツで水を運んできたり。でも、食材はいろんなところから届いて、不自由せずすみました。

しばらくして、避難所から学校や職場に通う人が多くなると、お昼の準備は楽になる半面、調理の人手が減って、夕食づくりが大変でした。夕食をすませて帰ってくる人もいるから、食べる人数がはっきりしないのも困りましたし。子どもたちが手伝ってくれたり、仕事を持って人も勤めのない日は調理当番に入ってくれたので、なんとか続けられましたけど。

避難所で暮らしていると、みんな、荷物がだんだん増えてくるんですよ。家財をほとんど流されてますから、もらえる支援物資は、とりあえずもらっておく。そのうちに、寝るところもないぐらいになってしまうんです。私は調理当番のほかにもいっぱい仕事があるし、いくら一生懸命やっても文句を言われたりで、なかなか大変でしたが、1か月ぐらい



で避難所を出て、近くのアパートに引っ越しました。

元の家の様子を見に行ったのは、アパートに移ったあとです。泥水と瓦礫でふさがれていた道路が、ある程度は通れるようになってから、まだ泥をかぶった田舎道をどうにか歩いて行ってみました。2階はなんとか残ってましたが、1階はもうめちゃくちゃでした。松の木とか、よその家から流れてきたものが引っかかって、とても入れる状態じゃなかったですね。

少しずつ家のなかを片づけ始めたのは、しばらくたってからです。家財道具はほとんど流されましたし、流されずに残ってたものも、壊れて使い物にはなりません。テレビや自転車なんかは、近くの田んぼのなかで見つけました。タンスは、東部道路の近くに流れ着いてました。中はすっかり開けられてました。衣類とか、あんまり要らないものは残ってたけど、指輪やネックレスは持っていかれてました。

泥棒も多かったですね。大きい道路が開通したとたん、道路沿いのお宅は軒並み、泥棒に入られました。1階がめちゃくちゃに壊れて、家の人がまだ入れないでいるところにも泥棒が入り込んで、2階のパソコンやテレビを持っていくんですよ。仏壇は見つかったのに、自分のお葬式代にしまっておいた現金だけ盗まれてたっていうおばあちゃんもいました。でも、お年寄り元気ですね。避難所でも地域でも、喧嘩しながら仲良くやってます。

私はそんな地域が好きなので、前と同じところに家を建てることに決めました。まだしばらくかかりそうだけど、家のそばの畑は直して、もう野菜をつくっています。最初の年は塩害のせいか、カエルもいない、スズメも来ない、生き物を全然見かけなかったのが、今年はダンゴムシやコオロギが大量に発生したんですよ。その虫たちが畑に栄養を運んでくれたのか、カエルやトンボが戻ってきたし、川でザリガニを見かけるようになったし、キジや海鳥も飛んできて、ネズミまで出るようになりました。

地域に戻るって決めた人はまだ少ないんですけど、生き物が戻ってきてるから、そのうちに、みんなが戻って来る日も来るんじゃないかなと思っています。

(談：2013年9月)

## 松林が無くなってしまうと、ごく近くに海が見えるんです

庄子フミ子（1950年生まれ）

震災時 若林区二木在住

6メートルの津波が来るって知らされて逃げ始めたときには、地震から40分か50分たっていたと思います。近所に家や建物が並んでいるので、家を出たときには何も気づかなかったんですが、田んぼのなかの道路に出たとたん、初めて津波が見えました。下の方が真っ黒で、上が白い煙のようになってました。わあ、津波だって思ったら、もう何がなんだか分からなくなって夢中で駆け出しました。夫は長靴で走りづらかったんですが、私の後ろを一緒に走ってきました。

家から200メートルぐらい走ったら、水が足もとに押し寄せてきて前に進めなくなりました。どうしようどうしようって、おろおろしてる時、近くの民家のご主人が「うちの2階に上がって来い、早く！」って声をかけてくれたんです。私は必死で走って、どうにか2階にたどり着いたんですけど、ずっと全力疾走してきたので、息が上がってそのまま動けなくなりました。苦しすぎて頭も働かなくなって、夫のことを考える余裕さえありませんでした。

その2階には、私とご主人のほかにも2人の若者が避難してたんですが、しばらくして、誰かが「その電柱に人がつかまってる！」って言ったんです。ベランダから身を乗り出してみたら、それが夫でした。辺り一面、泥水の海でした。水位は近くの平屋建ての屋根と同じぐらいありましたが、夫は水面のすぐ上で電柱にしがみついていた。電線作業用の横木を伝ってそこまで登ったんですね。津波で倒された電柱も多かったんですが、夫が登った電柱は近くの農園から流れてきたビニールハウスが引っかかったおかげで水の勢いが分散して、運良く倒れずにすんだみたいです。それと、あとで松の大木が流れ着いたのも幸運でした。それに腰掛けて電柱につかまることで体力の消耗が防げたんです。

夫の姿を見てほっとしたものの、水位が高すぎて、目の前にいるのに何もできなくて、「頑張って、頑張って！」と、必死で声をかけ続けるだけでした。そのうちに日が暮れて、お互いの姿も見えなくなる、津波の余波は何度も来る、声をかけても夫の返事が聞こえないことがあったりで、すごく心配しました。息子にメールで救援を頼んでも届きませんでしたし。

夜の11時ごろ、夫は体力の限界を感じたようで、まだ首の下まである水の中をどうにか歩いて、私たちのいる家までたどり着いてくれました。そのときには体がすっかり冷えきって、手も足も動かさなくなってたんです。乾いた服に着替えさせてもらったり、石油ストーブで温めてもらったりして、どうにか命を取り留めました。

次の日の午後、地域の人たちが避難している東六郷小学校に向かいました。あたりは瓦礫が散乱してるなんてものじゃない、どこに足を置いたらいいかもわからない状態でしたが、どうにか小学校に着いて、地域の人たちとお互いの無事を喜び合うことができました。小学校も大変な状況だったようですね。

うちの地域でも9の方が亡くなられました。地震のあったのは、若い人たちが勤めや

農作業に出ていて、家には高齢者だけというお宅が多かったんですが、その割に犠牲者が少なかった。消防団の人たちが手分けしてお年寄りの家を回って、車に乗せて避難させてくれたおかげです。

家を失った被災者は全体で1000人ぐらいいましたから、いくつかの避難所に分散して避難生活を送ることになり。私たちの地域は農協の支所にお世話になりました。被災から2、3日後には各町内会長さんたちが中心になって、地区全体の避難所運営委員会を立ち上げ、民生委員だった私も委員を引き受けました。最初のうちは、大量の支援物資の仕分けに追われたり、いろいろ不慣れなことが多くて大変でしたが、日がたつにつれて、だんだんうまく運ぶようになりました。

もちろん、集団生活ですから、いろんなトラブルが起こって、私も精神的にすごく疲れました。体調を崩す人も多かったんですが、うちの町内に限って言うと、そういう人は少なく、高齢の人たちは、むしろ元気になられた感じでした。ふだんなかなかお茶を飲む機会がなかった仲間と一緒に暮らすことで元気が出たんじゃないかと思います。その後、自分で住むところを見つけたり、仮設住宅もできたりで、最終的に6月初め、みんなでお掃除をして農協の避難所を解散しました。

うちは今、元の場所に新しい家を建てています。松林が無くなってしまうと、ごく近くに海が見えるんですね。震災直後は元の土地に戻りたがらない人が多くて、うちの夫と息子も、最初はそうでした。戻りたいっていったのは私だけだったんです。でも、夫は元の畑に通って瓦礫を片づけながら少しずつ農作業をしているうちに、ある日突然、戻ることにしたって言ってくれたんです。うれしかったですね。

ほかにも戻ってくる人が少しずつ増えています。ここは自然に恵まれた、すごく暮らしやすい土地だったんです。あの津波のことは、まるで夢を見ているような、現実じゃないような気がするときもある一方で、何かにつけて悲しい現実を思い起こすことも多いんですが、よその土地に移るっていう選択肢は、私の場合、最初からありませんでした。以前のように行かなくても、戻ってくる人が増えるのは本当にうれしいです。

(談：2013年10月)